

群馬大学数学科研修院

『数学を教えて学んだ事』

UCLA名誉教授 竹崎正道

2016年5月27日 金曜日

只今ご紹介頂きました竹崎です。1968年盛夏の8月に2年間の予定で渡米しましたが、後に詳しく話しますが、帰国したのは2005年8月で、結局37年間を海外で過ごしてしまいました。渡米した時3歳半だった娘は向こうで成人そして結婚しましたが、1999年の暮れに自宅での事故で他界してしまいました。兎も角、その間数学の研究と教育に従事したのですが、その経験、特に数学教育に就いての経験に就いてお話ししたいと思います。

長い海外生活になってしまいましたが、当初、出かける時は2年間の予定で東北大学を後にしました。然し、1968年から1970年代にかけて日本の大学は大変な学園紛争に見舞われました。東北大学へも学園紛争の荒波は容赦なく襲いかかりました。私の渡米前68年春から東大では学園紛争の深刻化が避けられない情勢が覆っていましたから、私は日本の学園紛争の情報には特に気を配って渡米しました。ベトナム戦争反対と学園改革、(特に医学部の研修制度改革)、の要求が合体した闘争は、東京大学当局の重大な誤りも重なり、泥沼化して行きました。60年安保騒動の轍を踏まないと言う保守政権の決意は固く、学生の要求は正否を問わず断固拒否され続けました。その結果日本の学園紛争は欧米の同じ頃起こった学園紛争とは様相を異にして、当初の理念も指針も失って迷走して、拳げ句の果ては浅間山荘事件に象徴される墮落の道を進み瓦解してしまいました。

その一方で、私の滞米研究生活は渡米前の予想を遙かに超えて順調でした。脱線ですが、最初の訪問地のPennsylvania大学で、私を招いて呉れた先生に

『私はこの一年何をすれば良いのか?』

と尋ねた所帰って来た答えは

『義務なんて何もないよ、ゆっくりして行けば良い!』
でした。私はびっくりしてしまいました。

『これは大変な所に来ってしまった』

と思いましたが。兎も角、何も義務はないのですから、自分の研究に精を出すしかありません。幸い研究は予想以上に順調でしたから、私は招聘して呉れた先生の顔を潰さずに済みました。

渡米するに当たり、海外滞在中に関わる研究主題を一応準備して出かけたが、たっぷり与えられた時間のお陰でその問題は予期した様な解決に漕ぎ付ける事が出来ました。それは、その前の年から、話題になって、疑問視されていた九州大学の富田稔先生が提唱された理論への下準備でもありました。Pennsylvania大学の岡僚達は富田理論を真っ向から否定していました。私は渡米の前年-67年春-に開かれた私の分野作用素環の初めての国際会議がBaton Rougeで開かれましたが、その時配られた九州大学の富田稔先生の予稿が場外で話題になっていて、数理解物理学の指導的地位にいたN. Hugenholtz氏に富田先生の予稿の正否の検討を依頼されていました。帰国後早速検討しましたが、予稿そのものは酷い間違いだらけでした。然し富田先生の主張の正否を検討する為に京都の数理解析研究所で開かれたBaton Rougeの国際会議直後に開かれた検討会で伊藤先生の師である富山先生の厳しい質問の総てに答えられて行く富田先生の姿から、予稿を積極的な見地から検討しようと思っていましたので、数々の過ちを総て直して富田理論が修正可能な事を確認していました。その事をN. Hugenholtz氏と作用素環論の世界的指導者であるJ. Dixmier先生に67年初夏に伝えました。J. Dixmier先生からは

『それは極めて大事な事だ!』

と言う返事を頂いてました。そんな訳で、渡米前に検討した時に自分では富田理論は正しいと結論していました。Pennsylvania大学では、私とは正反対の結論を出してましたから、私の結論を正当化する必要性がありました。それで、早速、持参した問題の解決の後、富田理論の正当化に取り掛かりました。その過程で富田先生の提唱された理論の後追いだけでは面白くないので、私自身の観察と理論を追加して、論文をまとめてPennsylvania大学の岡僚に提示しました。それは、作用素環論のそれまでの風景を完全に塗り替えるものだったので、1969年2月から5月に掛けて検討のセミナーが開催されました。私自身は最初の導入を担当しただけで、後は岡僚に論文を渡したただけでした。誤りが混入するのを避ける為です。幸い誤りは無く、富田先生と私の理論の正当性が皆に確認されて、今日富田-竹崎理論と呼ばれる理論の幕開けとなりました。これが私の

『ゆっくりして行きなさい』

と言われた事への返事となりました。セミナー参加者は正当性が段々确实になって行くにつれ、皆興奮していました。

然しその一方、日本に残っている友人達からは、学園紛争の墮落に伴う不毛な努力の消耗を訴える手紙が舞い込んで来ていました。結局、帰国が学問的な自殺行為になると言う結論で長い苦慮の末に米国滞在の道を選ばざるを得ませんでした。2年目を過ごしたUCLAでは私の米国残留希望を知ると即座に教授のポスト

トを用意して呉れました。1969年秋も深まった頃の事です。そして、永住帰国はそれから36年後の2005年8月になりました。学園紛争に関する私なりの意見は最後に時間がありましたら、触れる事にします。結論から言うと欧米のそれと比べた時日本の学園紛争の不毛さが目立ちました。

『正規の授業では何が起こったのか？』

さて、教授職に就いた私は早速学部と大学院の正規科目の授業を受け持つ事になりました。大学院の授業は私自身の研究成果を土台にした講義で、学生もそれをわきまえて聴講して呉れるので、言葉の事など私の方が学生に教わる事も多く、研究成果を更に上げる事が良い授業に直結している事が実感され、毎回の講義が励みになり、数学研究の醍醐味を味わう幸せを噛み締める日々の連続でした。又、学園紛争で苦勞している同僚や友人達の事を思うと自分が彼等の分まで頑張らねばならないと言う義務感にも後押しされる毎日でした。

海外に住む私に出来る事は限られていましたが、日本の同僚達が国外に出る事で一時でも紛争から離れて、研究に没頭出来る事が彼等の数学を教う一助になればと思ってそんな機会を創ったりもしました。又学園紛争に追い回されている同業の方々に、学問上の高い目標を掲げる事で研究推進の原動力になればとの思いで、日本で日米セミナーを開催する事を提案して1974年初夏に京都で私の分野での第一回目の日米セミナーが開催されました。こんな訳で、大学院の授業は順調でした。

然し、学部学生相手の授業は勝手が違いました。60年代後半の米国内の学生運動は各授業で学期末に教師の授業評価をすると言う新しい制度を齎していました。(日本の大学と大きく違う所です) 滞在3年目とは言え私の英語は彼等学生にとって、聞くに堪えない代物だったのでしょう。言葉の下手さもあり、授業評価は散々でした。然し、大学院での講義は私の研究を土台に展開していた事もあり、高い評価を得ていましたので、教室で私の教授職就任に積極的に動いて下さった先生方の面目はなんとか保つ事が出来たのは幸いでした。然し、学部の授業の評価が低い事は私自身を含めて大に問題でした。始末の悪い事に学生が私の採点方針にも色々と苦情や注文を付けるのです。特に医学部進学を志す学生には困りました。なにしろ、数学は嫌いだけど良い点数だけ欲しいと言う学生が多くて閉口しました。

授業評価の低いのは、私の自尊心の問題でもありました。英語はなんとか通用する様になった後は中々上達しません。娘からは、

『パパ、家では英語使わないで、聞き苦しいから！』

とまで、酷評される始末でした。私は此処で、数学の授業に就いて根本から考え直してみる事にしました。

『何故私はここで数学を教えなければならないのか？』

と言う疑問に答えようとしたのです。その為には私自身にとって

『数学は何なのか？』

と言う疑問に答えなければなりませんでした。私自身が数学を学生時代に何故選んだかと言う疑問です。私にとって、その疑問は数学を選ぶ時に考えた事を反省する事を余儀なくさせました。私の数学への関わりに就て語る為には戦中戦後の混乱について話す事を抜く訳には行きませんので、少し脱線と思われる方もおいででしょうが、勘弁してご辛抱下さい。

先ず、私の少年時代は戦争に明け暮れていました。空襲も経験しましたし、無敵を信じた仙台の第二師団は、仙台の空襲を通じて無力で無敵は嘘だった事を目の当たりにしました。戦後は鬼畜米英と唱えていた先生達が敗戦と同時に民主主義を唱えました。それどころか、冷戦が始まる中でマッカーシー旋風が吹いてレッドパージが始まり、左翼と見做されていた前進座の公演を見に行った学生を、彼等の優秀な成績にもかかわらず、在校生皆んなにも判る様なあからさまな米軍直接の圧力の下で、放校処分にする始末でした。なにしろ、米兵が自動小銃を構えて、校長室に乗り込んで来る程のあからさまな恐喝に、校長以下教員一同其れ等の優秀な学生に非があった事にして、退学処分にして自分達の保身を固める始末でした。本来ならば、哲学の学士号を持つ校長は、

『戦争に負けると言う事はこの様な無理無体も

受け入れざるを得ない事だ！』

と、自分の身を挺して、生徒達に

『自由と独立』

の大切さを教える機会だったのですが、保身を第一にした校長には荷が重すぎたのでしょう。所で、退学処分を受けた三人の生徒は一年遅れでしたが、検定試験を受けて全部大学を卒業されました。其れどころか、一人は国際的にも有名な天文学者になられて、東北大学の教授を務められました。

そんな、仙台の有名校でしたが、数学の教師と言えば種本を丸写しをする授業を繰り返していましたから、面白くもなともありません。試験もマンネリのくだらない問題が並んでいて、挑戦にはなりませんでした。時間の半分もかからないで、答案は出来てしまう始末でした。試験は満点でしたし、大抵の問題は先生より私の方が、早く答えを出していましたから、授業中は居眠りして、授業が空虚である事への抵抗を試みていました。数学が本当はどんな学問なのか知る術を持たない私は数学の授業が数学と思っていましたから、数学はつまらない退屈な教科で嫌いでした。全教科の中で一番退屈で下らない教科で習うことの何もない空疎な時間つぶしだと思ってしまったのでした。教科書も代金は母の内職で得たお金をもらっていましたが、コッペパンに変えて空腹を満たしてしまってい

ました。教科書を持たない事で、教科としての数学の無意味さへの抗議申し立てでした。数学の本当の姿の片鱗に触れて、学問として尊敬に値する分野だと悟った時は本当に勿体ない中学と高等学校一年生までの4年間だったと悟りましたが、後の祭りでした

そんな問題児の私の目を開かせて呉れたのが、当時学位論文の準備をしながら数学教師をされていた、今は故人となられた土田喜輔先生でした。後に学位を首尾よく取られて、弘前大学の数学の教授になられ、更に理学部長まで務められました。土田先生は裏本からではなく自分の言葉で数学の話をしていました。何より、凄かったのは学校が占領軍の直接の圧力で優等生三名を退学処分にした時、右往左往する先生達の間で数学を盾に微動だにしない姿勢でした。戦前、戦中そして戦後と混乱が続き、国のトップから教育者までが、真実ではなく虚偽が横行する中で、数学を拠り所とされ毅然としていた土田先生の姿が眩しく輝いていました。

父は外科医でしたが、徴兵で1940年に満州へ渡り一所謂関東特別演習の一環として一其の儘満州の陸軍病院勤務を続けて奉天で副院長として、敗戦を迎えました。病院長は職業軍人でしたが、ソ連参戦の報と共に蓄電してしまい、父が病院の責任者を務める中、進駐して来た八路軍一共産党軍一に名指して連行されて、国共内戦の中満州各地を転戦して、革命成就後はハルビンで医科大学の外科部門創設を革命政権に命じられて、帰国したのは戦後8年を経た1953年で、私が東北大学の工学部教養部二年生の秋でした。高等学校まで母子家庭だった私は工学部に進学していましたが、違和感に悩まされていた時の父の帰国でしたから、迷わず理学部の数学科への編入試験を受けて数学への道を歩き始めました。

そんな訳で、私にとって数学との出会いは真実への入り口でした。私は数学の本当の姿を自覚して以来、ノートから授業をする先生の講義は退屈に思えました。それで、私自身が数学科の学生になってからは、セミナーの当番の時はノートは作りましたが、話すときはノートを見る事を自ら禁じました。そして、聴衆の眼を見ながら話す様に心掛けました。そして、後年学生を指導する時もセミナーで報告する学生にはノートを見ないで聴衆の方を向いて話す事を求めました。今では、日本の作用素環論の専門家で学会や研究会の講演でノートを覗きながら講演する方はあまり見かけなくなりました。何時の間にかそれがこの分野の伝統になりました。

何にせよ、私にとって虚偽に満ちた戦前一戦後の時代で、数学が否応なしに真実を提示して呉れている事に気づけたのは幸いでした。これが私の数学の原点でしたから、役に立つかどうかは問題になりませんでした。実際に数学が役に立ちすぎる程だと言う事はずっと後になって知る事になりました。私が数学を始め間も無い頃には日本にこの人ありと勇名を馳せた俊才が、戦後の貧困が国中の標準だった時に貧困脱出に貢献出来ない自分を恥じて、

『数学は現代の錬金術だ！』

との言葉を残して自殺して、全国の数学を目指している人々を驚嘆させる事件がありました。それから半世紀近く経った1990年代にAndrew Wilesによる3世紀を超える超難題Fermatの予想の解決に決定的な役割を果たす成果を挙げている谷山豊氏でした。

然し、私にとっては数学は生きている事の証の様に感じられていましたから、応用の有無には関心が向きませんでした。そして、応用の有無でその価値を測る事には違和感すら強く感じました。当時の日本の貧困さの惨めさへの私の感受性は鈍かったのかも知れません。当時彼の嘆きは割と広く知られていましたから、年配の数学者が彼と真剣に向き合う事の出来なかった事は日本の数学の未熟さの証かなと後になって思う様になりました。

また、若い頃は気づきませんでしたでしたが、数学が学問として色々ある学問の中で一番単純な事も自覚しました。数学を難しいと思われるのは数学が単純な学問で一度挙げられた成果は時代を超えて輝き続ける事によるとも悟りました。因みに数学程若年で早く昇進する分野は他にありません。他の分野は経験の蓄積が無ければ研究が進められません。数学は考える事が出来る人なら誰でも研究出来ます。勿論世に認められる成果を挙げる事は、凡ゆる人間の活動の中で簡単ではありません。数学の真髄は物事を良く理解する事にあります。誤魔化しを排して徹底的に厳密さを土台にした理解を求めるのが、数学です。自分を誤魔化さない事と厳密さとは同意語です。どこまで理解しているのか誤魔化す事を拒否する事で自分の数学が始まります。数学が好きな子供は沢山います。子供は誤魔化しを本能的に嫌います。又、子供が数学の問題回答に至った時の快感は彼等を数学へ近づけます。こんな私の数学観を私の数学教育の土台にしようと考えました。又一見単純な道のりでも一步一步を忍耐強く歩き続ける事で、宇宙の果ての事にまで考察が及ぶ事の凄さを痛感したのも海外で数学研究を進めて、大勢の数学者達と交わった結果でした。I.M. Singerとは一対一で長時間数学が文化の下支えを担っている事に就いて議論した事もありました。

そんな訳で、UCLAでの授業はこの私の数学への想いを伝える事以外には在り得ないと確信しました。それで、私は各学期の最初の授業の出だして、

『私のこの授業の目的は諸君の自分自身を
発見するお手伝いをする事です！』

『数学では半分真実と言う事は在りません。従って、試験や宿題の答えは完全である事を求めます。不完全な答えは完全な回答に至るまで、繰り返し提出して戴きます。完全な答えに自分だけの力で到達できない場合は私とTAの助けを求めて下さい。凡ての学生に完全な回答に到るまで、私とTAはお手伝いします。学期末の成績はどれだけ手助けを必要としたかに依って評価します。不完全な回答には点数を付けません。』

と宣言しました。そして、学生が私の援助を必要とする時は何時でも私がオフィスにいる限り質問に来るようにとオフィス訪問を奨励しました。不完全な回答で宿題や試験答案を返された学生には、何度でもやり直しを命じたり、ヒントを与えたり、更にもっと手助けの必要な時は自分の目の前で助言を与えながら、完全回答に到達する様に仕向けました。そして、学生が完全回答に到達した時は精一杯の褒め言葉を与えると同時に

『お目出度う、君は遂に正しい回答に到達したね。この、君が『アツこれが正解か！』と判った瞬間の喜びと興奮を覚えておいて下さい。この判ったと真実に到達した事は君の宝で誰も君から奪う事はできない。たとえヒットラーと言えどもだ！ この君にとって真実をつかんだと言う事実とその喜びが、君が君自身の真実を理解したと言う事で、個人主義や民主主義はここから始まる事を覚えておいて下さい！』

と言う言葉を掛けました。そして、実際に彼等が正解に到達するまで、根気よく付き合いました。私の授業のTAは大変でしたが、私の意向を皆其々理解して協力して呉れました。学生も大変で途中で諦める学生も結構出ました。然し、最後まで付き合った学生は学期末の成績に文句を言いませんでした。そして、卒業後何年か経過してからも、推薦状を頼みに来る学生も相当数ありました。実際に、帰国してからも数年間は推薦状依頼のメールが来ていました。

数学の授業で学生に正解に到る喜びを感じてもらう事が教科としての数学が組み込まれて居る事の基本的な理由ではないでしょうか？ 正しい答えに到達した時の快感と興奮は他の教科では味わえない醍醐味だと思います。数学を不得意とする学生でも教師の手助けがあれば正解へ到達出来ます。又、不得意とする学生にこそ正解到達の醍醐味を味わってもらう事が大切だとUCLAでの授業を通じて学びました。そして、数学を苦手とする学生でも、忍耐力があれば正解に到達して貰える事を私は学びました。

数学を応用出来る幸運に恵まれないのが、大多数の学生の運命です。然し、真実に到達する喜びは一握りのエリートの特権ではありません。むしろ、将来数学の応用と縁のない学生にこそ、数学で得た自分自身の真実発見の努力と喜びを実感して欲しいと私は思っています。そして、そんな数学は教育の中心を担う土台になるでしょう。

今日民主主義があちこちで主張されています。然し、中味は語る人様々です。私は基本的人権を土台としない民主主義はまやかしたと思っています。デカルトの様に

『我思う故に我在り！』

を標語としてではなく、自分で数学の真実に辿り着く事で実感する事が数学授業の一番の目的だと思っています。

数学の応用は多岐に亘ります。数学を土台とした科学上、実生活上の成果は目を見張るものがあります。然し、その豊かな応用から、数学の重要性を語る事は数学の矮小化です。数学は個人主義、人権の土台を与えてくれています。数学本来の力は権力者にはとても怖いものです。

そして、教師にとってもそうです。教師より早く正解に到達する学生は必ずいます。彼等に対応出来ない教師は落第です。私は何時も講義する時は受講者の中に私以上の能力を持つ者がいる事を仮定していました。実際、現在数学界の帝王の様な存在にまで上り詰めたAlain Connes氏や京都の世界数学会議でフィールズ賞に輝いて、その後も度々日本を訪れてるVaughan F.R. Jones氏も彼らの若い時聴衆の中にいて、私の力を瀬踏みしていました。そんな時は私の学生時代の不良だった経験が物を言いました。彼等と上手くやるコツを何となく身につけていたのは幸いでした。彼等は今も大事な友達です。

Connesとの出会いは1971年夏でした。この夏には帰国を諦めて米国永住を決意して以来初めて帰国しました。当然の事ながら、私の決心が正しかったかどうかを確かめる事にもなりました。私の決意は正しかったと言う結論でした。然し、その結論は私にとってはとても悲しいものでした。その悲しさを抱えたまま、7月18日に羽田から富田-竹崎理論を主テーマの一つにして夏季学校が6週間開かれるSeattleへと向かいました。そこでの第一回目の講義の時に受講生の一人だったConnesが私の上げた条件の一つに対して、

『それは必要ですか?』

と質問しました。私はその条件が必要かどうかを富田-竹崎理論の講義録の中では曖昧にしてあったので、気になっていました。それはある解析関数の有界性に関するものでしたが、私は

『はい、有界性を過程した方が安全です。』

と答えた瞬間、彼は

『勿論です、そうでないと反例があります。』

と発言しました。この瞬間私はあつ彼は私を試したと思いましたが、同時にその若者の並々ならぬ才能を直感しました。これが私とConnes氏の出会いでした。こんな若者と競争するなんて、愚の骨頂と思ひ彼とは仲良くする様努めて、後の共著の大作の土台にしました。私の悪ガキ時代の経験が瞬間の対応に生きました。

さて、数学の一步一步は他の学問よりもはるかに単純です。そして、その単純さが又限りない数学の原動力でもあります。

『あっ判った!』

と言う瞬間を味わう事は数学の得意でない生徒にも可能です。そして、その瞬間の喜びを感じて貰う事を数学授業の目的とするならば、数学が得意な生徒にも不得意な生徒にも数学の意味を理解してもらえると信じています。数学を理解する速さには個人差があります。然し、忍耐と熱意があれば数学の珠玉に満ちた道のりを歩く事は誰でも出来ると私は信じております。数学を理解する為の道のりは一人一人違います。電光石火の天才もいれば、同じ事を何度も繰り返さなければ

理解出来ない人もいます。百人百様の道がある事を数学の教師は理解すべきです。生徒一人一人が違うアプローチが必要な事を教師が理解して努力すれば、数学が不得意な生徒にも数学を好きになってもらえる事を私は学びました。

『個人主義否定の教育の齎した物
60年安保と失われた世代』

此処で60年安保闘争以後の日本の教育とその齎した事に就いて、私が観察した事を述べて本講演の締め括りとしましょう。

皆様もご存知の様に1960年は岸信介総理の主導する日米安保条約改定を巡って日本中が大騒ぎになり、国会周辺で大規模なデモが繰り返され東大生の榎美智子嬢の死去もあって、アイゼンハワー米大統領の訪日中止、岸内閣の崩壊と言う経過を辿って、安保条約改定が強行されました。当時は冷戦の真最中で、多くの人々が自由主義者も共産主義を信じました。共産主義が深刻な内的矛盾を抱えている事に思いが至らず、共産主義が好きか嫌いかの差でした。共産主義者以外の人々は共産主義を恐れて何とかこれを封じ込めようと躍起になりました。何しろ、フルシチョフ書記長は訪米の際に、

『共産主義が資本主義を埋没させる！』

と豪語する位でした。兎も角60年安保闘争の幅広い展開を目にした日本の保守層、特に権力の中樞にいた人々は此の儘放置すれば、日本で共産革命が遠からず起きるのではないかと憂慮しました。それで、安保条約改定が済み、岸信介退陣後に有力な保守政治家達は秘密の研究会を持ちました。そこでの結論は、

『日本の共産革命阻止の鍵は教育にある。

独創性を重んずる教育は両刃の刃で
アイレンシュタインやニュートンの様な
天才も育つだろうが、マルクスやレーニンの
様な革命家も輩出させる。

それならば、安保条約もあり、
日本は戦前戦中の様に世界相手に戦う

訳ではないから、

天才はもう必要ないだろう

天才の言う事をいち早く理解する

秀才を多く出せば十分だ！』

でした。この話は70年代半ばにUCLAに私を訪ねて呉れた権力の中樞部に親戚を持つ数学教育に業績を上げられた先輩数学者から直接聞いたものです。その後の日本の教育界を観察すれば、この秘密の申し合わせが文字どおり実行された事が判ります。まず、教育委員会の公選制を任命制になりました。ついで、教員の勤務評定などと教育現場への権力の介入があり、又教員の自主性が疎んぜられる状況が全国の多くの教育現場で浸透して行きました。更に、60年安保闘争の主力を学生運動が担いましたから、学生運動の徹底した弾圧でした。60年代末から70

年代にかけての学園闘争は徹底的に弾圧されました。彼等の主張の正否は問題ではありませんでした。実際に彼等の要求の多くは後日そっと実現しました。然し、要求は正否を問わず拒絶されました。60年騒動を繰り返さないと言う権力者達の強い意志の前に学園闘争は漂流して、墮落の道を歩んで、学園内外の同情を失いました。そして、崩壊してしまいました。学生運動を敵視して、その衰退を図った権力者の意図は大成功を収めました。

所で、この保守層の勝利はその後の日本に何を齎したのでしょうか？ 独創性の軽視、個人主義の否定は何を齎したのでしょうか？ 結論から言ひましょう。

『失われた20年と失われた世代』

と言われる1990年バブル崩壊以来の日本経済の停滞です。学生運動の崩壊を目の当たりにした世代が世の中核になった時代に、時代の要求を満たす独創性を持つ起業家や政治家は現れませんでした。日本では経済成長政策の下で、大企業中心の産業発展が図られました。然し、70年代以降の情報産業の進歩は中小企業や個人に依る新しい産業により引き起こされましたが、この新しい波に日本は取り残されました。独創性が嫌われた教育の齎した影響は甚大です。

Steve WozniakやSteve Jobs或いはBill Gatesの様な起業家は日本に現れませんでした。80年代、90年代に起業家として活躍すべき個性的な人々は60年代から70年代に掛けて淘汰されていました。又2000年代には社会の指導者として活躍すべき人材も既に枯渇してしまっているのを今私達は目の前にしています。正に教育の怖さです。指導者として学生運動に関わった人々の淘汰のつけが今になって表面に出て来たと言ひ私は感じています。

因みに米国では学生運動に関わる事は就職の時にはとても有利に働きます。カリスマ性は育てられない天性のものだと社会が理解しているからです。子供の時から、

” Be Yourself”

と教育されて個性的である事を徹底的に仕込まれた人々の中から起業家が現れて来ているのです。和を重んずる教育からは起業家や変革期の世の指導者は生まれて来ません。

個性を大事にする教育で今一度この国を立て直して頂きたいと切望しております。皆様のご健闘を期待しております。

『余談』

私の海外生活の37年間は振り返ってみればあつと言う間でした。娘を失った事を除けば幸せな37年でした。私達の幸せを支えてくれた土台の大事な一つが住宅です。今スライドでお見せしますが、この家には1977年春から2004年初夏まで住みました。所で、この家に住む事になった背景にMartin Luther King牧師の不服従市民権運動があつたと言つたら皆さん驚かれますか？ この辺は中産階

級の人々の住むとても快適な場所です。ここへ日系米国人の友人を招くと口々にこんな素敵な場所にどうして住む事が出来たのかと不思議がられました。彼等が言うには

『私達日系米国人はこの辺に住む事など、
人種差別の壁の為夢の又夢で不可能だった。』

と話されるのです。私はその話を何度も聞かされるので、調べて見ました。その結果判った事は、昔はこの辺は白人しか住めない場所で、初めに東洋系の人にこの辺に住宅購入を世話した不動産業者は村八分にされて、此処から撤退を余儀なくされたそうです。事情が変わったのは1960年代に全米を覆ったKing牧師の不服従市民権運動の結果、差別が非合法化され、更に60年代末にはAffirmative Actionと呼ばれる法律も出来て過去の差別の結果不利になっている階層の救済処置が取られました。その結果として、私達が渡米して家を求めた時—1970年春—には、日系人に対する住宅購入に関する差別が消えていた訳でした。と言う訳で私達家族はKing牧師の市民権運動の受益者だった訳でした。

実際私達が渡米した60年代に、暑い夏と呼ばれる暴動が毎夏米国の大都市の黒人住居地域を中心に起きていました。私達の身の安全を心配した父が出発間近のある日、自分の中国での何度か死線を潜って生き延びた経験を元に、

『なあ正道、海外に出たら、自分の命に代えてでも
守って呉れる友達が居るか居ないかが、
生死を別ける事がある事を覚えておけよ！』

話して呉れました。数学者で医者ではない私にそんな友達が簡単に出来る訳もないが、教育を通じて学生を大事にする事で父の言葉に応えようと思って出かけました。実際、自分のお弟子さんにロスアンゼルス暴動の時に助けられた事がありました。

ご静聴有難うございました。



